欺瞞における意図の曖昧性に関する心理学的研究

人間文化学研究科　人間行動論専攻　行動発達論講座

黒川　優美子

論文要旨

本論文では，虚偽性と意図性を伴う利己的嘘を「欺瞞」と呼び，3 つの研究を通して欺瞞の意図性から欺瞞の検討を行った。本論文は 5 つの章から構成される。第I章では，本研究で取り扱う嘘について定義を行った上で，これまでの欺瞞研究における問題点として意図性を指摘し，意図の曖昧あるいは明確な欺瞞について概説した。その上で，これまで意図の明確な欺瞞に焦点が当てられていることから，意図の曖昧な欺瞞を含めて欺瞞の意図性について検討することを目的とした。

第II章の研究 1 では，非対人場面において欺瞞の意図が欺瞞出現に及ぼす影響を検討した。また，欺瞞を行うことを肯定的に捉える者や，繰り返し課題を行うことで欺瞞が上達すると考える者は，より欺瞞が容易に行え，欺瞞行為によって逸脱しやすいだろうと考え，嘘をつくことに対する認識からの検討も行った。その結果，先行研究と同様に，欺瞞の意図が曖昧かつ欺瞞が動機づけられる場面において，欺瞞回数と欺瞞による逸脱が増加することが示唆された。特に，欺瞞は上達すると考える者ほど，欺瞞の意図が曖昧かつ欺瞞が動機づけられる場面において欺瞞回数が増加した。一方で，欺瞞による逸脱では，嘘をつくことへの認識と欺瞞意図の操作との関連は見られず，それぞれが独立して影響を及ぼしていた。これらの結果を踏まえ，欺瞞の回数や欺瞞による逸脱を同一視するのではなく，それぞれを異なる指標として捉えることが望ましいと言える。

第Ⅲ章の研究 2 では，他者の存在および欺瞞出現の時系列的推移を検討した。具体的には，欺瞞を行う相手を明確にし，その相手から当該の行為がどのように理解されるかを意識させつつ，欺瞞の透明性を低めた状況を設定した。そして，繰り返し欺瞞を行う機会があることによって欺瞞が拡大していくのかを検討するため，欺瞞を繰り返し誘発する課題を実施し，欺瞞の出現頻度だけではなく欺瞞の出現間隔も検討した。また，意図が明確な欺瞞と意図が曖昧な欺瞞の出現傾向や欺瞞の出現間隔も検討した。その結果，試行を経るごとに意図の明確な欺瞞の出現頻度が増加したことを示した。これは，欺瞞を繰り返し行うことにより，欺瞞の出現間隔が短くなり，欺瞞が次々と行われるためである。また，意

図の曖昧な欺瞞は，意図の明確な欺瞞よりも出現頻度は高かったものの，試行を経るごとに増加するというよりも，常に一定の出現頻度であることが示唆された。

第IV章の研究 3 では心拍率（heart rate; 以下 HR）から検討を行った。その結果，意図の曖昧な欺瞞よりも意図の明確な欺瞞において，欺瞞後 0.5 秒で HR の減速が見られた。一方で，意図の曖昧な欺瞞では，正確に回答する場合の HR と差がなかった。このことからも，意図の明確な欺瞞においては，HR に影響を及ぼすものの，意図の曖昧な欺瞞の場合，生理的にみても参加者自身が欺瞞を行っていると強く意図するものではないことが示唆された。さらに，欺瞞回数を前半と後半に分け，生理反応の検討を行った。その結果，意図の明確な欺瞞において，欺瞞の後半で HR の減速が見られ，特に欺瞞後 0.5 秒において顕著であった。一方で，意図の曖昧な欺瞞ではこのような減速が見られず，前半も後半も同様の HR が見られた。

第V章では研究 1 から研究 3 までの内容を概説した。3 つの研究を通して，意図の曖昧な欺瞞が行われやすいだけではなく，この欺瞞によって，さらに意図の明確な欺瞞を誘発することも示唆された。これは，小さな逸脱がより大きな逸脱へと導く「滑りやすい坂道効果（slippery slope effect）」と同様の結果であると考えられる。ただし，本研究では，結果の大小というよりも，意図性がこのような滑りやすい坂道と同様の結果をたどるという点で新たな発見である。つまり，行為者が意図しない程度の欺瞞だったのが，繰り返すことにより意図した欺瞞の出現を高める可能性があるということである。そして，その背景には道徳的関心の低下の前段階として，自身の非倫理的行動を認識させにくくする「倫理的盲点（ethical blind spot）」の存在があると考えられる。このような倫理的盲点を減らし欺瞞を抑制させるため，今後は欺瞞の可視性だけではなく，欺瞞の透明性も高める必要があることを示した。一方で，本研究の課題として，欺瞞の行為者にとって欺瞞かどうかが曖昧な状況を設定しており，欺瞞の受け手が実際は欺瞞をどのように認識していたかまで把握できていないことが挙げられる。このため，今後は欺瞞の行為者だけではなく，欺瞞の受け手から実際にどのように欺瞞が捉えられていたか，受け手の目線で検討する必要があると考えられる。また，本研究では，欺瞞の透明性を低めていたものの，先行研究ほど高い欺瞞表出は見られなかった。この点について，オンライン実験であったとしても，実験をしているという認識をいかに減らしていくかについても考えていく必要がある。

氏　　名：黒川　優美子

論 文 題 目：欺瞞における意図の曖昧性に関する心理学的研究

学　位　名：博士（人間文化学）

学位取得日：2022 年 3 月 10 日

指 導 教 員：秋山　学（神戸学院大学心理学部教授）

主　　査：山本　恭子（神戸学院大学心理学部教授）

副　　査：石﨑　淳一（神戸学院大学心理学部教授）

副　　査：早木　仁成（神戸学院大学人文学部教授）

副　　査：秋山　学（神戸学院大学心理学部教授）

副　　査：鈴木　直人（同志社大学心理学部名誉教授）